
アマガミ(仮)

いーくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマガミ（仮）

【Nコード】

N6580X

【作者名】

いーくん

【あらすじ】

アマガミの「今」を切り取った、短編集です

色々更新予定

「君と私と兩宿り」(前書き)

前書き

駄文ですが、最後までお付き合い下さい

「君と私と雨宿り」

「じゃあね、響ちゃん」

「またね。はるか」

その日、いつものように響ちゃんと別れ、帰ろうとした。

だけど……

「あつ、そうそうはるか」

後ろから響ちゃんに呼び止められる。

「雨降ってるけど、大丈夫？」

「え？ 雨」

こりゃ当然帰れそうにないや。

「君と私と雨宿り」

雨の降る中、私は学校の玄関で雨脚が弱まるのを待っていた。
はあー……

なんでこんな日に雨なのかな？

響ちゃんには傘があるから大丈夫って言ったんだけど、まさか今日に限って忘れるなんて……

学校の玄関から眺める雨はちつとも弱くならない。
逆にだんだん強くなっているような気もする。

「困ったなあ。こりや帰る時間、遅くなりそうや」
そんなことを思っていると

「あれ、森島先輩？」

後ろから突然名前を呼ばれる。

「あれ、橘君？ どうしたの？」

そこには、最近知り合った橘 純一君が、たくさんのノートを抱えて立っていた。

「先輩こそ、帰らないんですか？ そろそろ暗くなりますよ？」

「うーん、帰りたいのは帰りたいんだけど……」

チラッと外の方を見る。

「ご覧の通り雨なのに、傘を持ってきてないのよね」

「だったら僕のを貸しますよ」

やっぱりというか、予想通りの返事が返ってきた。

「それは駄目。それだと橘君が帰れなくなっちゃうじゃない」

「僕は走って帰りますよ。大丈夫ですよ、この程度の雨くらい」

「だからダメ」

「うう……」

まるで叱られた子犬のようにうなだれる橘君。

もう！ほんとに可愛いんだから。

「君が雨の中、走って帰っちゃうと、次の日に風邪を引いたりしたら申し訳ないでしょ」

「そうですよね……」

「それに……」

私は橘君が持っていたノートの束を指差し、

「橘君、まだ用事があるんでしょ。こんな所で油売ってていいの？」

「ああ、そうだった！ これを高橋先生に持っていかなきゃ！ それじゃ先輩、失礼します」

そう言って、駆け足で職員室の方に消えていった。
まだまだ雨、やみそうにないや。

「森……輩……………下さい」
誰かが私の肩を叩いてる。

誰だろう？……？

「森島……起きて……………」

うーん、後少し。

「森島先輩、起きて下さい」

その言葉で目を覚ます。

どうやら、寝てしまってたみたい。
寝ぼけた調子で辺りを見渡すと、

「あれ、橘君？ どうしてここに？」

「どうしてって、僕も用事が終わったんで、帰ろうと思ったら森島先輩がウトウトしてたもんで……」

そうだった。私、雨が止むのを待ってたんだっけ。
でもまだ降ってるけど。

それでもさっきよりは弱くなっていた。

「先輩、疲れてるんですね？ やっぱり僕の傘、貸しますよ」

「だ、大丈夫だって！ このくらい……その……平気だもん」

「ほ、本当ですか？ その割に顔色が良くないようですが……」

「だ、大丈夫大丈夫！」

（そんな顔しないでよ。　こっちまで落ち込むじゃない）

「橘君は帰らないの？」

「この状態で帰れる訳ないじゃないですか」

「え？」

「森島先輩を一人にして帰れる訳ないじゃないですか」

そんなことを笑顔で言わなくても……

ほんのちよつと、沈黙が流れる

でもそれは――

「あ、見て！　橘君！」

「え？」

いつの間にか雨は上がり、綺麗な青空が広がっていた。

「んーやっぱり晴れると気持ち良いね」

「そうですね」

「こんなに気持ちよくなれるのなら、たまには雨の日もいいかもって思うわね」

大空に向け、精一杯伸びをする。

その時見つけた青空一杯に広がる虹。

「見て！ 虹！」

「え？ ほんとだ……綺麗ですね」

さっきまでの憂鬱なきもちが嘘みたいに消えていた

これって、隣りに橘君がいるからかな？

自分の気持ちに確信が持てない。

「あの、橘君！」

「先輩！ 僕、今から用事があるんでお先に失礼します！」
そう言って走り出す橘君。

「あ、ちよつと！」

……………

もう、用事があるなら私と一緒に待たなくてもよかったのに……

でもそこが、あの子の魅力なのかな？

「どうしたの、はるか？　こんな所で……ああ」

後ろから響ちゃんが話し掛けてくる。

「わかる？　響ちゃん」

「分かるわよ、そりゃ……そんなにニヤけてればね」

「ふふふーん」

どうしよう！　にやにやが止まらない。

「橘くん！」

こんな気持ち初めてかも！

大声で名前を呼ばれて、少し驚きながら、振り返る橘君。

「ありがとう！」

それに答えるように手を振ってきた。

その後、橘君の姿が見えなくなるまで、私は手を振っていた。

「さっ！　帰りましょ、響ちゃん」

「はいはい……」

雨上がり、虹がかかる青空の下、私は走り出す。

「ちょっと待ってよ！ はるか」

胸のときめきが止まらない。

今日は眠れないかも。

雨の雫が垂れている花を見つけ、立ち止まる。

私の中で、恋のつぼみが今輝きだす。

「君と私と兩宿り」(後書き)

アトガキ

次回は棚町 薫編です

「うたかたDAY、S」(前書き)

棚町 薫編です

「うたかたDAY、S」

いつもの帰り道、私達はいつものように3人並んで帰宅していた。
いつもと同じ光景――

それが心地よくて、こんな時間がいつまでも続けばいいと思った。

でも――

そんな時間は続かない。

いつかは終わってしまう。
だからあたしは――……

「ほら、純――！　行くわよ――！」

「行くって、どこにだよ？」

「それは行きながら決めるの」

「全く……唐突だな。薫は」

「ははっ大将、そう言っても、いつものことじゃねえか」

「ほらっ、行くわよ」

「はいはい……」

あたしは二人の手をとって、無理矢理走り出す。

「い、痛い！ 薫！ もう少し優しく引っ張ってくれよ」

「ぐずぐずしないの。 ほら、行くわよ」

今のこの時間を精一杯楽しむんだから！

「うたかたDAY、S」

それは恵子の一言から始まった。

「ねえ薫、駅前に新しくお店ができるんだって」

「駅前に？ それってどんなお店なの？」

「さあ、よく分からないんだけど、聞いた話によるとなんか凄いらしいよ」

「どのように凄いのよ……」

「で、こんど二人で行ってみたい」

「良いわね！ 賛成」

こうして、あたしと恵子は翌日にその謎のお店に行くことにした。

翌日

「つてな訳で、その肝心の店がどこにあるか探すわよ」

「ちよつとまて薫。なんで僕達が探さないといけないんだ」

「いいじゃない別に。文句があるなら、場所を忘れた恵子に言いなさい」

「うう……ほんとにごめんなさい」

全く……恵子も恵子なんだから。

「田中さん、そのお店がどこら辺にあるか大体でいいから教えてくれると探し易いんだけど」

「ええと……たしか駅から歩いて10分くらいって聞いたけど」

「だったら二手に別れて探した方がいいかも」

「そうね その方が早いし」

「だったら僕と薫で西口方面を探すから、梅原と田中さんで北口方面を探そう」

「ラ、ラジャー」

「任せる大将」

「それじゃ純一、あたし達も行くわよ」

「う、うん」

「ねえ純一 あんた卒業したら進路どうするつもり？」

「進路？ まだ具体的には考えてないけど……一応進学かな」

「ふーん」

「そついう薰こそどうなんだよ」

「あたしも一緒みたいなものよ」

「ふーん……」

「それにしても見つからないわね。 恵子め、ほんとにそのお店あるのかしら」

「梅原達も探してるんだし、もう少し探してみようよ」

「ここ……みたいね」

少し小ぢんまりしてるけど、新装開店って書いてあるし、多分ここで間違ない。

「さて、あとは一回駅に戻って……」

「おい、薫」

「え、恵子？」

見ると、恵子達が手を振りながらこっちに向かってきていた。

「薫も見つけたんだ」

「遅いじゃない！ あたし達が先に見つけるなんて」

「ごめんごめん。人に聞いたらここしかないって」

「早速入りましょ」

「中々良い場所ね」

「そうだね」

四人席に案内され、座る。

「で、何頼む？」

早速、メニュー見てみる。

「これなんかどう？」

恵子が隣りから、メニューを指差してくる。

「ほんと、美味しそうね」

「なあ、大将。俺らついていけないんだが……」

「梅原、僕もだよ」

一通り食べ終えたあたし達は、いつものように雑談していた。

これといって、他愛もない会話。

今日はなにがあつた。テストがどうだこうだ。純一が今日もドジしたとか、あたし達の間に会話が尽きることはなかった。

こうやって、一つ一つ大切なものを見つけていくんだと思った。

翌日

「おはよっ!」

「薰か、今日も元気だな」

「当たり前じゃない！ ほらっ早くいかないと遅刻するわよっ」

「ま、待ってよ！ 行くよ、梅原」

——こうしていつものように駆けて行く。

あたしの毎日がきらめいていく。

「うたかたDAY、S」（後書き）

えーども、いーくんです

今回「うたかたDAY、S」をかいてみて、反省すべき点はまだ薫の話の一つも見えてないことです

ゲームの方も未クリアです

これからも駄文を投稿していくと思いますが、温かい目で見守って下さい

次回は順番どおりにいけば、中多紗江になりますが、どうなるかわかりません

多分、別の話がいいると思います

—それでは

「PROLOGUE」(前書き)

シリーズものです

長い目で見守ってください

「PROLOGUE」

朝、いつものように起き、身だしなみを整えて台所に向かう。

今日の昼飯をどんなにするか考えながら、冷蔵庫を開ける。あまり材料が残ってなかったので簡単に焼飯を作る。その後、朝食を簡潔に済ませ、学校に行く支度をする。

キリのいい時間に家を出て、学校に向かう。少し時間的に余裕があったかなと思い、いつもよりゆっくり歩くことにした。

途中、クラスメイトに何人か出会いながら、一緒に話しながら歩いて行く。丁度いい時間に学校に着く。教室に入り、自分の机に座り、鞆の中からノートと教科書を取り出す。教室を見渡すと、登校時間のピークなのか、沢山の生徒が出入りしている。

チャイムがなり、クラスメイト達も席に着き始める。担任の先生が今日の予定や、連絡事項などを伝えていた。それを上の空で聞き流しながら、窓の外を見る。

―何の変哲のない風景

いつもと同じ顔ぶれ

輝日東の冬

変わらない僕達の毎日が始まる―

「memories」

巡 維月 編

m e m o r i e s ? (前書き)

詳しくは後書きで

m e m o r i e s ?

メケル
イツキ
巡 維月編

唐突に意識が現実へと戻り、働かない頭で現状を認識しようとする。自分が教室の後ろの、さらに窓際に座っていて授業を受けていることまでは分かった。

先日の席替えで、運良く後ろの窓際の席に座れたことで、授業中に居眠りをする回数が増えた。

そりゃ、冬の日向って気持ちいいからね……………

僕が集中しようがしまいが授業は続いていく。

さてもう一眠りするか。

もう一回夢の中へ入ろうとすると

「巡君、次に居眠りしたらどうなるか分かってんでしょっかね？」

鋭い！高橋先生

このあときつちり絞られた。

m e m o r i e s ？（後書き）

急遽長編を投稿してみました、いーくんです

主人公はオリキャラです

オリジナルが苦手な方はすっ飛ばして、後の（でるかどうかわかりませんが）短編を読んでください

まだ小説を書き始めて日が浅いですがこれからがスタートとなるので感想やアドバイス等よろしく願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6580x/>

アマガミ(仮)

2011年10月25日15時05分発行